

光陰似箭

「烈士子女」と「官僚トップ」李鵬

(法政大学) 趙 宏偉

李鵬（1928年10月20日 - 2019年7月22日）は、国务院（内閣）総理、全国人民代表大会常務委員会委員長（議長）、中国共産党中央政治局常務委員等の要職を務めた。彼はポスト革命戦争世代の中共指導者としては典型的なタイプであり、後継者の初代である。そこで、彼を知ることは、今日までの中共指導者と今後の政治変動について考察する上での一つの好例となろう。

「革命烈士子女」

烈士とは今日の公のために死んだ殉職者にも与えられる称号であるが、元は中共の革命戦争期に設けられた称号であり、当時は「革命烈士」と呼ばれ、「烈士子女の面倒を見る」は、革命同志たちの合言葉だった。李鵬、そして江沢民というポスト革命戦争世代の中共指導者のツートップは、偶然にもともに革命烈士子女だった。

1980年代、革命戦争世代の長老たちが後継者問題を議論している中、「やはり俺たちの子なら、信頼が置けそうだ。少なくとも俺たちの墓をぶっ壊さないだろう」と陳雲が言っていたとされるが、この言葉は、口コミでひろまっていた。陳雲、鄧小平らはソ連のフルシチョフのスターリン批判、そしてゴルバチョフのペレストロイカがソ連共産党政権の失敗と転覆に繋がったと考え、さらにフルシチョフもゴルバチョフもただの労働者階層の出身であって、共産党政権への愛着が足りなかったとみなしていた。陳雲曰く「墓をぶっ壊す」ことは、フルシチョフがスターリンの墓を開けて遺体を燃やして他所に移葬したことを指している。

共産党はイデオロギー上、労働者階級を出身階級と自称しているが、革命戦争世代の中共指導者

たちだけではなく、配下で戦っていた私の父親レベルの高中級幹部でもみな市紳やら郷紳やらの富裕層の出身だった。なぜだろうか。恐らく「漢字」という難解な文字が、古代から階層分化の作用をもっていたためではないだろうか。革命戦争期の中国の労働者階級は、みな字が読めなかったといっても過言ではない。私が耳にしていた話では、字の読めない素朴な兵士たちが戦場で字の読める数少ない学生兵に「後ろに行け！死んだらもったいない」とよく言っていたという。

毛沢東、鄧小平らは救世主の志で素朴な民たちを救おうとしながら、民を見下ろしてきたのではないか、それに文化大革命の教訓からわかるように煽られやすい愚民だともみていたのではないか。私の記憶では、1979年、文化大革命時での打倒から名誉回復されて党中央組織部長に着任したばかりの宋任窮の署名で「今後、ただの労働者を黨員として受け入れない」という文章が『人民日報』にあって、「労農第一」と教えられてきた私はびっくりした。

李鵬の父李碩勛は、1920年代の上海大学の学生であり、弱冠24歳で中共初の赤軍部隊の聯隊党代表になったが、かの林彪は彼の部下の中隊長だった。李碩勛は1931年に国民党軍に処刑された。上海の租界で生まれて暮らしていた李鵬は、後に秘密のルートを通して中共根拠地の延安に護送されたため、李の履歴に「延安中学校卒」があるわけである。

江沢民は揚州の富豪の次男であり、1939年に父の弟、中共系の新四軍軍人の江上青が戦死した後に、江上青の家系を絶たせてはならないという習俗に従って江上青の養子に籍を移された。江沢民は革命烈士の子女になったわけだが、1940年代南京の汪兆銘政府の中央大学に入学し、戦後に転校して上海交通大学を卒業した。

両者を比べてみると、江沢民より、李鵬の方が正真正銘の革命烈士の子女だといえよう。近ごろ、

中国でも諸外国でも江沢民時代の方がまだ寛容的だったと囁かれているが、何しろ小学校の時から米国の独立宣言を英語で暗唱できると自慢する江沢民の生い立ちがあったからだろう。

建国後1950年代、最高レベルの教育はソ連の大学への留学であり、烈士子女の李鵬も江沢民も第一陣でソ連留学に派遣された。そして当時、最高と思われていた専攻は工学であり、李鵬は発電、江沢民は車製造を専攻した。また最高の職場が最新鋭の国有大企業だとされる時代に、卒業後、李は日本が作ったアジア最大の小豊満水力発電所、江はソ連援助で竣工したばかりの中国初の車工場（第一汽車製造廠（長春市））に最高学歴のエンジニアとして就職した。1960年代に文化大革命があったが、烈士子女の李と江は、高級幹部の親をもっていない分、政治闘争に巻き込まれることなく、70年代にそれぞれ国務院電力工業省と機械工業省に抜擢されて政官界入りをした。

1992年に、鄧小平はポスト革命戦争世代の最初の後継者に、俺たちの子である烈士子女の江と李を選んだが、その次に胡錦濤を「欽定」した。胡錦濤党総書記と温家宝首相（2007年～13年）は、民国期の上海租界の茶商と天津の教員家庭の出身者であり、やはり労働者階層ではなかった。

私の検証では、1992年に鄧小平はさらに3代目の後継者に習近平（習仲勳元副首相の子）と劉源（劉少奇元国家主席の子）を熟慮した上、習近平に「欽定」した（趙宏偉『中国外交論』明石書店、2019年、176-181頁）。正真正銘の「俺たちの子」だ。

では、ポスト習近平に「俺たちの子」が続くだろうか。鄧小平のただ1人の男孫である鄧卓隸は、習近平が国家主席に着任した2013年に28歳（1985年生まれ）で、鄧小平が25歳の時（1929年）、革命根拠地をつくった広西省平果県の副県長に任命された。鄧卓隸は米国生まれ、北京大学とデューク大学を卒業した法学修士だ。推測される習近平

の退任の年である2037年に、鄧卓隸は62歳になり、要は24年間の修行後に習の後継者候補になるかと思われた。ところが、鄧卓隸は2016年にすでに副県長を退任し、翌年にコントラクトブリッジ北京協会理事兼プロ選手としてメディアに現われた。祖父鄧小平はブリッジが大好きで、自分も大好きだと言う。「俺たちの子」はすでに苦労知らずのドラカオタクかと化し、当てにならない。まさか「君子之澤，三世爾斬」（君子の沢，三世にして斬えん『戦国策・触讐説趙太后』）になるのだろうか（趙宏偉「習近平新時代中国特色社会主義思想の検証」『国際問題』日本国際問題研究所、2018年7・8月号）。

官僚トップ（テクノクラートトップ）

李鵬は電力工業省系の職場を歩み、国務院電力工業相の後、副首相、首相と、「国務院幫（族）」こと官僚畑トップの経歴だった。対して江沢民は1985年に電子工業相から上海市長に異動、後上海市党委員会書記になった。中共は党と国家のトップになる条件に地方省レベルのトップを経験することという内規を有する。数千万から1億の人口の地方省を治めれば、一国を治める経験を得るとして、はじめて官僚から政治家に成長するという考えだ。が、李鵬と次世代の温家宝首相は、地方経験がなく中央官僚一筋だった。

私は96年に江蘇省党第一書記、新華社香港支社長という返還前の中共香港トップを歴任した後に米国に亡命した許家屯にインタビューしたことがある。（趙宏偉「省党委員会書記の権力」天児慧編『現代中国の構造変動・政治』東京大学出版会、2000年）。許家屯は、鄧小平が香港返還に向けて今までの外務官僚ではなく政治家を使って香港各界に対して統一戦線工作を展開しようとし、許を派遣したこと、また最もおいしいポスト、天下り先を失った外務系から許家屯打倒、「失地奪還」の工作を受けて許が米国亡命に追いやられたこと

を語ってくださった。

実は今年の香港動乱について中国の政界では、香港駐在の外務官僚たちが、民意の扱い、種々の勢力の扱いができないことが一因だと議論され、香港の財閥たちも「官吏は官（政治家）と吏（公務員）で、官ではなく吏に香港を任せていて、今日の混乱を醸成してしまった」と公に批判している。

要は、政官一体の中共も政治家と官僚は相違なるといふ意識を持ち、とりわけ中華民国期を歩んできた鄧小平世代はその使い分けがわかっている。そして中国の官僚集団も、明治以来の日本官僚集団や米国で時の話題に上がっている「ディープ・ステート（deep state）」と同様、縄張りを争う利益集団であり、主導したがるパワー集団だ。

中国政治には、三大パワー、「党務幫（族）」（党中央機関）、「国務院幫」（中央行政族）、「諸侯」（地方省権力）があり、略して政・官・地方という。情報と行政権を集中している国務院幫は、乱れを嫌がってすべてを規制してきちんと管理したが、自己完結の行政権に距離がある党務幫は、行政に改革の名で介入したが、地方諸侯たちは自由度を欲しがり、中国的特色をもつ権力のバランスを構成している（趙宏偉『中国の重層集権体制と経済改革』東京大学出版会、1998年、232頁）。

李鵬は1989年の天安門事件後、諸侯兼党務幫の趙紫陽からの改革の名での介入による「乱」をようやく脱したとして、これからすべてを規制してきちんと管理するのだと意気込んでいたところ、工業も農業も経済も下落し、1990年のGDPが3%台に落ち込んだ。「一放就乱、一管就死（一たび放すと乱、一たび管理すると死）」は、まさしく当時の流行言葉だった。李は教訓を得て、1991年4月から副首相に上がってきた経済通の朱鎔基に経済の陣頭指揮を任せることにした。

胡錦濤時代の中央官僚一筋の温家宝首相も1、2年目にきちんとすべてを管理しようとしていた

が、李鵬ほどの権威もなく程よく諦めて「發展こそ鉄則だ」という鄧小平のテーゼに拘る以外、関知しないことにした。おかげで2桁GDP成長は任期の10年間続いた。

前述の流れを見ると、習近平は諸侯から中央党務幫（2007年から党政治局常務委員兼国家副主席として党務の修行、李克強は党政治局常務委員兼筆頭副首相として行政長の修行）を経験し、地方の自由度も中央の指導もわかる指導者のはずだが、自己を司令塔として政・官・地方を1つの指揮命令系統に改造し、指令をもってすべてを手堅く管理することにした。それに党務、行政、地方のすべてに無経験且つ中央官僚畑の一経済研究者の劉鶴を経済政策決定と執行の要に据えた。この体制は表面的にいままでの三大パワーの競い合いを抑えて効率を高めているようだが、バランスが崩れる分、「乱」がない分、活気もダイナミックスもなくなり、効率も鈍った。

新任の指導者はみな学習期間が必要であり、前述の江沢民、李鵬、胡錦濤、温家宝も2年ほどの試行錯誤を経た。習近平政権の成立はすでに7年間も経過したが、中国経済史上初の7年連続の減速という記録を作っただけだった。「経済音痴」「失われた7年」は、中国で左中右問わずにエリート層の共通認識になっている。中国での言葉で問うと、「国民はいつまで学費を払い続けるんですか」。

正真正銘の「俺たちの子」だから、政権防衛上の過剰意識、偉大な復興の過度の使命感で、プレッシャーが重すぎて余裕がなくなったのだろうか。